博士論文要旨

「幕末維新期における民衆の主体形成論の再考―菅野八郎と信達地方を事例として―」

SD171002　青野　誠

１．本論の課題

本論は菅野八郎（一八一三〈文化一〇〉～一八八八〈明治二一〉）の営為と信達地方を事例として、幕末維新期における民衆の主体形成について再考するものである。幕末維新期の民衆が、周囲の人々といった具体的存在から超越的存在に至る様々な次元の他者と対峙するなかで、いかに自らを一個の歴史的存在として位置付けていったのか。その過程について、思想の変遷を追って明らかにした。

八郎は、幕末期の代表的な世直し一揆である信達騒動の頭取とみなされていたことから、先行研究においては、ながらく世直し思想を有した「変革主体」と位置付けられていた。こうした変革主体としての菅野八郎像は、『日本思想大系』に八郎の史料が載録されたこともあって、広く受容されることになった。以降の研究の多くは、彼が変革主体であるという視角を半ば無批判に受容し、民衆思想を分析する際の代表的事例として、八郎を引用してきたといえる。

近年ではそうした視角の見直しが図られており、ふつうの人間、日常的抵抗者、自己実現を目論んだ百姓など様々な八郎像が提示されてきている。こうした人物像の変遷の背景には、研究者個人の問題関心はもちろんのこととして、学界―そして社会―における民衆に対する視角の変化と、歴史研究・思想史研究の進展が密接に関係していた。

つまり、ながらく代表的な民衆の事例として引用されながらも、その前提となる菅野八郎像については、未だ検討の余地が残されているといえる。こうした状況において、八郎の思想形成過程を明らかにし、変革主体に収斂されない視角を提示することは、八郎を代表的事例として用いてきた、民衆思想研究そのものを再考することにもつながると考えられる。

そこで本論では、特定の歴史像の下に八郎の営為を演繹的に落とし込むのではなく、彼個人の思想形成過程それ自体を研究対象とし、特にその変遷に着目した。そのうえで、彼の事例を既存の社会秩序から逸脱した特殊事例として断章するのではなく、同時代および地域社会の文脈上に位置づけることを目的とした。

また八郎の地域社会における位置付けを考えるべく、信達地方における思想水脈の分析を行った。従来の先行研究においては熊阪台州（一七三九〈元文四〉～一八〇三〈享和三〉）の陽明学と早田伝之助（一七九一〈寛政三〉～一八七四〈明治七〉）の石門心学が八郎に影響を与えたと論じられてきた。しかし、これは三者の思想を十分に比較検討したものでなく、八郎を変革主体とみなしたうえで、その世直し思想の淵源を地域社会のなかから見出そうとする視角に基づいていた。

そこで本論では、台州と伝之助を八郎へ直接、影響を与えた存在とみなすのではなく、八郎

が生まれ育ち思想形成した地域社会に、いかなる思想・学問が瀰漫していたのかを探る手掛かりとして分析する。すなわち、台州と伝之助の思想形成を通して、信達地方の思想水脈を探ることで、間接的に地域社会が八郎の思想に与えた影響と地域社会における八郎の位相について考察した。

２．本論の構成

序　章

一、問題の所在

二、先行研究の成果と課題

三、本論の立場と方法

四、本論の対象

五、本論の構成

第一部　菅野八郎の主体形成

第一章　「家」意識と超越観念―東照宮信仰と士分化運動を事例として―

はじめに

一、菅野家の「家」意識と家格上昇志向

二、駕籠訴の実施と東照宮信仰

三、近世社会における超越観念

四、東照宮信仰と「御国恩」意識

五、「家」意識と水戸藩仕官運動

おわりに

第二章　世界観と自他認識の変容―「異国」・「異人」認識に着目して―

はじめに

一、嘉永・安政期における天譴災異としての「異国」

二、文久期における夷狄としての「異国」

三、慶応・明治初期における夷狄としての「異国」

四、明治一〇年代における日本の「開化」と自他認識

おわりに

第三章　天文観と天人唯一思想―『真造辨　八老信演』について―

はじめに
一、諸説に対する八郎の評価
二、八郎の天文観
三、烏伝神道の天文観とその影響
おわりに

第四章　自己像／他者像としての菅野八郎―〈まなざし〉とイメージの主体形成論―
はじめに
一、駕籠訴―天下ニまれなるべし―
二、安政の大獄―遠冥加に叶し我身―
三、八丈島経験―下賤の業には冥加に叶ふ事ならん―
四、信達騒動―世直し八郎大明神―
おわりに

第二部　信達地方の思想水脈

第五章　熊阪台州の思想形成と地域社会―〈学者〉と〈豪農〉のあいだ―
はじめに
一、〈文人〉熊阪台州
二、〈経世家〉熊坂台州
三、〈豪農〉熊阪宇右衛門
おわりに

第六章　早田伝之助における民衆教化と学問―信達地方における石門心学と平田国学―
はじめに
一、地域社会の荒廃と復興政策
二、〈石門心学者〉早田伝之助
三、〈気吹舎門人〉早田伝之助
おわりに

終　章
一、本論の成果
二、残された課題と展望

３．各章の要約

第一章「「家」意識と超越観念―東照宮信仰と士分化運動を事例として―」においては、八郎の「家」意識およびその重要な構成要素である東照宮信仰に着目し、彼の行動規範について分析した。

八郎は当初、菅野家の由緒を南朝武将に求め、地域社会における自家の家格上昇を目論んでいたが、駕籠訴実施後にその性格が変化し、八郎個人の士分化を図って水戸藩へ仕官運動を展開することとなった。この背景には八郎の篤い東照宮信仰が存在していた。この信仰は先行研究で指摘されるような自己実現のための手段・方便としてではなく、その信仰に基づいて「御国恩」に報じることこそが八郎の目的であったと指摘した。

第二章「世界観と自他認識の変容―「異国」・「異人」認識に着目して―」においては、八郎の史料に見える「異国」・「異人」の記述やそこに模写された地図を手がかりとして、その世界観の変遷について考察した。

当初、天譴災異として「異国」を捉え、幕府の対処に拠る「太平」維持という仁政を期待した八郎であったが、その脅威が具体的に認識されるに伴い、夷狄としての「異国」認識が強まっていった。明治一〇年代には、表面的な文明化・啓蒙化に取り組み仁政を顧みない政府に対しての不満から、「外国」よりも現在の日本は劣っているという認識に至った。

そして、情報の受容の仕方に着目すると、八郎は当初、他者から与えられる情報を書き留めるのみだったが、次第にそうした情報を選別し、自らの解釈によって世界観を再構築していった。それは、「異国」「異人」を認識することによって、日本人としての自己の存在を自覚する過程でもあったのである。

第三章「天文観と天人唯一思想―『真造辨　八老信演』について―」においては、従来、等閑視されてきた著作『真造辨　八老信演』の分析を通して、明治期の八郎がいかなる天文観を有し、それによって自らの生きる世界を如何様に認識していたのかについて考察した。

そのテキストからは、八郎が西洋天文学、仏教天文学をはじめ諸説に関する知識を有していたこと、彼にとってそれらの多くは「造理」であり、「真理」とは陰陽説に基づくものと認識されていたことが読み取れた。そして、こうした陰陽説に基づく天文説は、梅辻規清の影響を受けたものであった。それは、陰陽説を「真理」とした演繹的に導き出された世界認識だが、その背後には望遠鏡による観測結果と陰陽説の一致という経験があった。すなわち、八郎は諸説のなかから陰陽説に基づく世界観を帰納的かつ主体的に選び取ったのだと論じた。

第四章「自己像／他者像としての菅野八郎―〈まなざし〉とイメージの主体形成論―」においては、八郎の記述に見られる「自まん」など自身を肯定的に捉える表現と、「愚」という相反する表現に着目し、八郎にこうした意識を抱かせた他者からの〈まなざし〉が八郎の主体形成に与えた影響について考察した。

安政の大獄によって自覚した百姓という身分意識は、政治関与の桎梏となる一方で、そうし

た身分にもかかわらず国事に関与した自身を「適冥加に叶」「誉れ」と認識させることになった。同時に百姓ながら国事に関与し「世直し大明神」とみなされた八郎を「誉れ」とする認識は、同時代の人々にも共有されていた。そして、自らの能力と百姓身分という二重の強烈な「愚」意識があったからこそ、他者の〈まなざし〉に敏感に反応しながら、自らの位相を認識し主体を形成していったのだと結論付けた。

第五章「熊阪台州の思想形成と地域社会―〈学者〉と〈豪農〉のあいだ―」においては、熊阪台州に着目し、彼の徂徠学派に対する態度の変化を分析することで、近世後期の地域社会における学問および学者の位相と、その思想形成に地域社会が及ぼした影響について考察した。

台州の思想形成および寛政期を転機とする徂徠学からの転回は、学者と豪農のあいだに位置する彼の立場性に強く規定されたものであった。天明の飢饉後における地域社会の維持と改善のため、豪農として救済事業を実施し「世教」に「益」たる学問を追究するなかで、徂徠学が現実社会と齟齬をきたしたゆえの転向であったと位置付けた。

そして地域社会の側は、台州の救済活動を歓迎しながらも、その思想を共有することはできなかった。台州が望む「修身」や「実践」は百姓にとっては困難であり、為政者の即自的な御救を要求せざるを得ない状況であった。ここから「儒学の大衆化」時代においても、地域社会では、飢饉や疫病の危機という現実と学問の齟齬が生じていたことを指摘した。

第六章「早田伝之助における民衆教化と学問―信達地方における石門心学と平田国学―」においては、早田伝之助に着目し、彼の教化活動の変遷を通して、幕末期に一層困窮する地域社会において、いかなる学問が要求されていたのかを検討した。

伝之助が組織した勧善舎は、心学道話による組織的な民衆教化を実施しつつ、舎中による救済事業を伴った活動であった。平田国学についてもその実用的側面を強調するなど、伝之助は地域に利益をもたらす手段として学問の受容に努めたのであった、彼は台州のように学者としてではなく、地域指導者の立場から学問を導入したゆえに、石門心学者と平田国学者という二つの立場を同時に有することも、彼にとってはさしたる葛藤なしに可能だったのである。

そして伝之助の活動は、信達地方が抱える課題に即したものであり、心学道話には民衆の能動的参加が窺えるなど、地域社会の期待に応じた活動であったといえる。こうした特定の学問に固執せず、地域に利益のあるものを緩やかに導入する姿勢こそ、地域社会が指導者へ求めた態度であったと論じた。

４．本論の成果

第一部では、菅野八郎の主体形成について、特にその変遷過程を重視しながら分析を加え、その人物像の再考を試みた。

まず、八郎が最重視していたのは、為政者による仁政の実施とその結果もたらされる泰平の

実現であり、それを希求する姿勢は終生変わることはなかった。幕末維新期の社会状況は、泰平の創始者としての神君家康の恩義、すなわち「御国恩」に反するものと認識されたからこそ、八郎はその「信心」ゆえに地域社会の枠を超えた活動を展開することとなった。

仁政への希求が一貫していたのに対して、それを脅かす存在としての「異国」イメージや自らをとりまく世界についての認識は徐々に変化していった。幕末維新期には真偽混在した情報が地域社会へ流入したが、八郎は、そうした情報・知識を取捨選択のうえで再構築し、自らの依拠する世界観を主体的に選びとっていったのである。

そして、彼の主体形成には他者の〈まなざし〉が深く関わっており、誰かの目に映る他者像としての菅野八郎像を自覚し反映することにより、自らの位相を認識していった。自らの能力と百姓身分という二重の強烈な「愚」意識に苛まれていたからこそ、自身の功績を殊更に強調し、他者から受けた「美名」をと自認する必要があったのである。

かつての先行研究においては、八郎が意思強靭な「強か者」 であったという認識がなされてきた。さらに、民衆の主体形成を論じる研究で重視されてきたのは、そうした民衆の強靭な意思についてであった。それに対して、本論の検討から浮かび上がったのは、「他者の〈まなざし〉を敏感に意識するナイーブな存在」としての菅野八郎像である。そうした彼の主体形成過程は、自らのアイデンティティを支えていた既存の価値観が揺らぐなかで、絶えず様々な次元の他者を意識せずにはいられず、それらと対峙する自らの位相を相対的に認識することでなされたものであったといえる。

そして、こうした八郎の主体形成を支えたもの、家長として「家」を存続せんとする意識、東照宮信仰に象徴された仁政への期待と泰平への報恩意識、「異国」への関心と危機感、天地自然と自身の結びつきの自覚、そして他者の〈まなざし〉――これらは幕末維新期の社会に広く浸透したものであった。すなわち、多くの民衆が八郎同様に、他者の〈まなざし〉に規定された主体形成過程を辿り、主体的活動を展開していく〈可能性〉は存在していたのである。その意味で菅野八郎は、幕末維新期における民衆の主体形成を、極めて先鋭的に具現化した存在として位置付けられるのである。

このように、強靭な意思に基づく主体形成という視角に収斂されない、民衆の主体形成のあり方を指摘した点が、本論第一の成果である。

第二部では、熊阪台州と早田伝之助の思想形成と活動から、信達地方における学問の位相について検討した。両者とも飢饉後の地域社会の荒廃に対し、自らの経済力を用いて積極的な救済事業を実施していた。そうした活動が居村を越えて広域に及んでおり、その帰結として地域社会から深く感謝されていた点でも、地域社会における両者の活動は似通っていた。

しかし、台州はあくまで私財を用いた救済を実施し、その学問も概ね自身と弟子の属人的関係から成立していた。それに対し、伝之助は自らの私財に加えて、心学講社を組織して金銭と人手を動員しており、心学の普及についても組織的活動を展開した点に特徴があった。

豪農でありながらも、終生学者としての自意識を持ち続けた台州は、現実社会と学問の齟齬に葛藤し思想転回した。対して伝之助は、地域指導者の立場から地域復興の手段として学問を活用したのであり、諸学を併用混合することに葛藤が伴わなかった。これは、一八世紀後半における台州の活動と蹉跌を踏まえ、一九世紀により地域社会が荒廃するなかで、伝之助が地域社会の要求に即したかたちで学問を活用したと捉えることも可能である。

そして、彼らの活動による地域社会外部との交流は、信達地方に様々な思想・学問の流入をもたらした。そして彼らはそうした学問を民衆にまで開放し、地域社会の民衆教導に努めんとする意思を有していた。すなわち、八郎が思想形成した信達地方では、諸学へ接触可能な環境が備わっていた。しかし、疲弊した地域社会において、多くの民衆は学問それ自体を目的化することは困難であり、何よりも地域の維持復興に寄与することが学問に求められていたのである。

このように、信達地方における学問の位相と民衆の学問観を明らかにしたことが、本論第二の成果である。